Bulletin of Jumonji University, vol.48, 2017

研究ノート

# 自主社会活動における評価方法の検討と学生のコンピテンシー伸長の分析

## Examination of evaluation method in voluntary social activities and analysis of student's competency

安達　一寿[1)]
Kazuhisa ADACHI

星野　祐子[2)]
Yuko HOSHINO

### 要旨

本研究では、学生の自主社会活動での学修成果を多面的に測定することを目的として、アンケートやルーブリックによる自己評価、ｅポートフォリオに記述された自由記述文の分析を行った。その結果、学生の学修成果の観点からは、今後の学修や就活に役立つとの認識が醸成され、対人領域・対自己領域のコンピテンシーの伸長が見られた。また、アンケートとルーブリック評価、自由記述文の分析を組み合わせることで、学生の学修状況を多面的に評価できる可能性があることが明らかになった。今後の課題として、信頼性を高めるための方法の検討やコンピテンシー間や活動内容との関連性の検討がある。

### １．はじめに

本研究では、本学学生の自主社会活動での学修成果を多面的に測定することを目的として、アンケートやルーブリックによる自己評価、ｅポートフォリオに記述された自由記述文の分析を行ったので、その結果について報告する。また、得られる結果より、コンピテンシーに関わる評価方法、及び評価指標の開発を試行し、必要な要件を整理する。

中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」[1)]では、我が国の大学が授与する学位としての学士が保証する能力の内容として「知識・理解」、「汎用的能力」、「態度・志向性」及び「総合的な学修経験と創造的思考力」を挙げ、各大学が学位授与の方針を明確化すること促している。これは、社会経済構造の変化の中で、大学が地域の拠点になるとともに、地域社会を支える人材に必要な能力を示したものと捉えることができる。

そして、中央教育審議会答申「新たな未来を築

[1)] 十文字学園女子大学人間生活学部 メディアコミュニケーション学科
Department of Media Communication Studies, Faculty of Human Life, Jumonji University
[2)] 十文字学園女子大学人間生活学部　文芸文化学科
Department of Literature and Culture, Faculty of Human Life, Jumonji University
キーワード：学習評価、高等教育、コンピテンシー、テキストマイニング、社会活動

くための大学教育の質的転換に向けて」[2]では、３つのポリシーの方針の策定・公表とともに、授業や教育プログラム等の成果をプログラム共通の考え方や尺度（アセスメント・ポリシー）に則って評価し、改革サイクルを定着させることの必要性を述べている。また、成果の評価にあたっては、学修時間の把握といった学修行動調査やアセスメント・テスト（学修到達度調査）、ルーブリック、学修ポートフォリオ等、どのような具体的な測定手法を用いたかを併せて明確にすることを求めている。

これを受けて本学では、共通教育のディプロマ・ポリシーに汎用的能力（ジェネリックスキル）育成を定義すると共に、総合的な学修経験の機会を設定することとした。総合的な学修経験としては、他学科の授業履修、課題型学習、サービスラーニングなどがあるが、共通教育のキャリア教育領域（2017年度カリキュラム）で、サービスラーニングとしての「自主社会活動」や「インターンシップ」、課題解決型学習としての「企業に学ぶキャリアデザインⅠ・Ⅱ」を実施している。

## ２．これまでの研究の整理

本研究と関連する研究には、キャリア教育や汎用的能力の育成に関するものと学生の自由文記述の分析に関するものがある。それぞれの先行研究の状況について整理する。

### （１）キャリア教育や汎用的能力の育成に関するもの

野本他[3]は、学生が大学での学びや体験をどのように捉えているか自身の体験を振り返り、自己成長につなげることを意図して、初年次からキャリア形成の意識づけを目標とした科目を共通教育科目に設置している。その中で、コンピテンシーが身についたきっかけを示す「コア・エピソード」の記述を分析することにより、学生のどのような体験が能力形成につながっているのか考察している。その結果、省察の質を問うことはかなり困難な課題であるが、学生の自己評価と現在の能力は、客観的な評価とされる科目成績と関連は認められなかったとしている。一方で、テキストマイニングを用いた学生の学び分析の可能性については、学生の体験を可視化することに長けた方法としている。

成田[4]は、現代の日本の高等教育においては「研究者モデル」「教養人モデル」「職業人モデル」「社会人モデル」として整理される能力や資質を、それぞれの大学の個性に即して多元的に育成・評価することが求められているとし、そのためには各大学が独自にディプロマ・ポリシーを定め、教育全体のデザインとそれに整合した評価方法の構築こそが求められているとしている。そして、現代社会を生き抜くためのジェネリックスキルを、教育と企業・社会をつなぐ共通言語として可視化し、教育可能なレベルまで具体化することの必要性を指摘している。併せて、ジェネリックスキルを客観的に測定するテスト（PROG）を用いた多元的な評価モデルの構築を提案している。

### （２）学生の自由文記述の分析に関するもの

山西[5]は、質的な言語データを取り扱う方法として、ソフトウェアを利用したテキストマイニングを取り上げ、実際の授業に関する自由記述アンケートの回答データをもとに分析の手順や結果の提示・解釈手順を示している。結論として分析の有効性が示され、留意点として分析者の視点が重要と指摘されている。

須田[6]は、授業のリアクションペーパー記述内容に基づく学生の学びの可視化手法を開発し、授業固有の学びの特徴が明らかになると同時に、可視化手法の有効性を示している。その中で、記述内容に対して視点や手法を提供することによって、そこから学びの実態（学生が授業内容のどこに着眼し、それに対して理解や思考などのどのような反応を示しているかという実際の状態）を抽出・可視化することが求められる、としている。

また、こうした自由文記述内容分析の研究としては、事実報告型（記述内容をそのまま報告する）、質的解釈型（記述内容を解釈する）、カテゴリー分析型（記述内容をカテゴリーに分類する）といった分類ができるとしている。

## 3．本研究での評価方法、及び評価指標の検討

本研究で対象とする自主社会活動での学修成果の測定（アセスメント）に関して、先行研究での知見を踏まえて、以下に整理する。

Linda Suskie[7] によれば、最善のアセスメント戦略は、主にアセスメントの目的とその対象となる学修成果によって変わり、さらにアセスメントで利用可能な資源によって、その決定に影響を与えるとしている。一方、中教審答申[1] で示されている「知識・理解」、「汎用的能力」、「態度・志向性」及び「総合的な学修経験と創造的思考力」の４領域の能力の内容の測定では、それぞれに応じた評価ツールを準備することが必要で、そのうえで、各評価ツールによる測定結果を多面的に判断することが重要と考える。

沖[8] は、評価ツールの内、ルーブリック評価や学修ポートフォリオは、プログラムの効果検証のみならず、個々の授業の総括的評価や形成的評価にも積極的に活用が図られる必要性を示し、授業の到達目標の達成度を公平、客観的かつ厳格に評価することが、大学教育の質を担保する要である、としその有効性を指摘している。また、ルーブリック評価は、達成水準が明確になることにより、テスト法では困難な「思考・判断」や「関心・意欲・態度」、「技能・表現」の評価に向くとされ、大学では学生の示したパフォーマンスをもとにして、学生の活動などの自己評価・相互評価に有効であるとしている。つまり、自己評価のアンケートと併用することで、評価の有効性が期待できることになる。

同様に、坪井[9] は、ジェネリックスキルの測定として自己評価と相互評価の可能性を検証しているが、行動特性を併記したルーブリックには一定の信頼度があり、自己評価や相互評価が容易になる点を指摘している。これより、ルーブリックでの自己評価と自由記述文での記述内容を比較することにより、より信頼度が増すことが期待できる。

以上の点を勘案し、本研究では、学生の自主社会活動によって、学生自身がどのような能力を身につけたのか、を上記の４領域の能力を多面的に測定することを試行する。そのために、評価ツール・評価指標として以下のものを準備した。

① 自主社会活動に関するアンケート（５件法）―自己評価
　これまでの経験、満足度、役立度、主体性、知識・技能、思考・判断・表現力等
② ジェネリックスキルに関するルーブリック評価
　ディプロマ・ポリシーに対応したコンピテンシーに関する評価規準で、活動前後での評価段階の自己評価
　評価規準の内、特に自らコンピテンシーが伸長したと考える項目順
③ ｅポートフォリオで報告した自由記述文
　自主社会活動で学んだこと、成果など、の記述内容をカテゴリーに整理・分析

上記①に関しては「知識・理解」、「態度・志向性」、「技能・表現」、②に関しては「汎用的能力」を測定するために実施する。③に関しては「総合的な学修経験と創造的思考力」に加え、①と②で測定する項目との関係性を吟味し、評価の信頼性や有効性を検討するために実施する。そして、得られる結果より、コンピテンシーに関わる評価方法、及び評価指標の開発を試行し、必要な要件を整理することとする。なお、①と②に関しては、度数や基本統計による分析、③に関しては、学生の自由記述文を分析者の視点、及びテキストマイニングによる分析を行った。

## 4．対象とする自主社会活動の概要

「自主社会活動」（全学共通科目―キャリア教育、半期１単位）は、学生が自らの意志で参加したプロジェクトやその他の社会的な活動に参加して、大学の授業内の体験では経験できないことからの気づきや学びの獲得を目標とする。学生が学内外での社会的な活動（無償）を35時間以上行い、総合的な評価のもとに単位認定を行っている。

今回の研究では、「自主社会活動」履修者の内、2016年度後期履修者16名を対象として分析を進めた。参加した自主社会活動の状況を、表１に示す。活動の紹介は、本学COCセンター、ボランティアセンター等で行っており、活動先は、社会福祉施設、教育施設、NGO･NPO等主催、民間企業主催等に渡る。

自主社会活動への参加方法は、次の通りである。

① 学内での説明会参加
自主社会活動の意味・位置づけ、活動の探し方、活動の紹介、手続きなど
② 参加する自主社会活動を決定し、担任教員へ連絡
③ 就職支援課へ申込書を提出
④ 自主社会活動の実施
⑤ 活動終了後、ｅポートフォリオで活動日誌、報告書等提出
⑥ 履修登録
⑦ 報告会での発表

## 5．アンケートなどの結果と分析

### （１）自主社会活動の自己評価に関する結果と分析

自主社会活動後の報告会時に、自主社会活動の自己評価アンケートを実施した。アンケートの結果を図１、表２に示す。

表１　自主社会活動の参加状況

| 自主社会活動の名称 | 参加学生数 | 概要（学生の記述の抜粋） |
|---|---|---|
| シニア健康運動教室 | 5 | 新座市の高齢者の方の健康の維持、増進をするにはどのようなことをすれば良いのかをシニア健康教室を通して学ぶ |
| さつまいもプロジェクト | 4 | 新座市で収穫したさつまいもを実際に調理し、それを商品として販売し、その売上金を東日本大震災後の東北の復興支援に役立てる |
| 東野ココフレンド | 4 | 子どもの放課後の居場所づくりのサポートを通して、小学生がどのようにして、遊び、学習をしているのかを実際に自分の目で見る |
| 若者イニシャチブ | 3 | 子どもたちとの関わりを通して、生活の中での児童館の役割、環境の変化などについて関心をもつ |
| スポーツビジネス体験 | 2 | スポーツを支える側や運営する側からスポーツを見て学びを深める |
| 小川町ユネスコプロジェクト | 2 | 地域活動の企画・運営を地域の方々との協働を行うことで、地域に存在する様々な課題を認識し、自分事として関わり、解決のサポートを行う |
| 染の小道 | 2 | 学外でのイベント企画・運営を通して、学内だけでの活動では学ぶことができないことを体験し、様々な年代の方々と関わり、コミュニケーション能力を身に付けるとともに、自ら行動する力も身に付ける |
| ダンスパフォーマンス | 1 | 地域の活性化に自分の好きなダンスで貢献するとともに、活動を通して自主性、社会性を身に付ける |
| 総計 | 23 | |

※複数の自主社会活動に参加した学生がいるため、履修者数と総数には差がある。

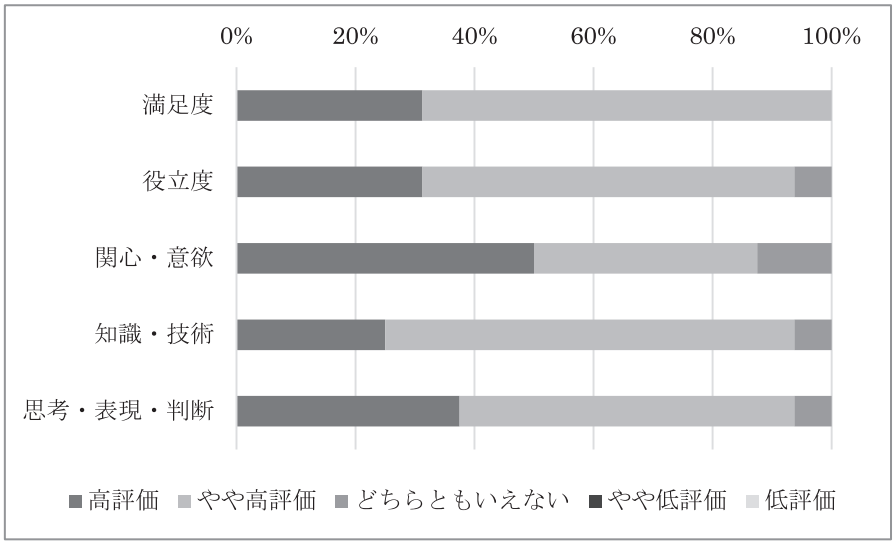


図１　自主社会活動の自己評価の得点分布割合（５件法　n=16）

表２　自己評価アンケートの項目得点の平均

| | 満足度 | 役立度 | 関心・意欲 | 知識・技術 | 思考・表現・判断 |
|---|---|---|---|---|---|
| 平均 | 4.3 | 4.3 | 4.4 | 4.2 | 4.3 |
| 標準偏差 | 0.5 | 0.6 | 0.7 | 0.5 | 0.6 |

※平均－高評価５点～低評価１点として算出

自主社会活動の経験が初めての学生は５名で、残りの経験者の内、単位認定を受けたことがある学生が４名、単位認定を受けたことがない学生が７名であった。自主社会活動の情報入手先は、キャリア教育センター・就職支援課と担当教員からの紹介が大半を占めている。

図１、表２の結果より、いずれの項目に関しても学生の自己評価は高評価であった。自主社会活動を行った結果、今後の学修や就活に役立つとの認識が醸成され、満足がいく活動が行えたことがうかがえる。ただし、「関心・意欲」と「思考・表現・判断」の項目に関しては、他項目に比較すると、やや自己評価の偏差が大きいことがわかる。サンプル数が充分でないため断定はできないが、活動内容による影響があると考えられる。

### （２）ジェネリックスキルに関するルーブリック評価の結果と分析

本学では、共通科目のディプロマ・ポリシーに対応したコンピテンシーに関するルーブリックを開発している。ルーブリックで設定したコンピテンシーの評価規準を表３に示す。コンピテンシーの各評価規準に対応して、４段階で評価基準を設定している。例として、評価規準「協働する力」の評価基準を示す。

レベル１―集団の中で、周囲に迷惑をかけないよう、自分の担当の仕事をきちんと遂行することができる

レベル２―自分に割り当てられたことでも、最良の結果がでるように、自分なりに工夫して課題に取り組んでいる

レベル３―自分に割り当てられたことが周囲にどんな影響を及ぼすかを考え、最良

表３　共通科目のルーブリックでのコンピテンシー評価規準

| | |
|---|---|
| 知的コンピテンシー－知識を活用する力 | |
| 読み解く力 | 文章を読んで、意味や記述者の意図を理解することができる |
| 書き表す力 | わかりやすい文章を書くことができる。レポート、論文、発表の資料などわかり易くまとめることができる |
| 資料を活用する力 | 図表等を用いた表現など状況に合った活用を行なうことができる |
| 創造する力 | これまでのことにとらわれず、課題に対して新しい解決方法を考える |
| 論理的に表現する力 | 論理的に考えたことを、（文章や口頭および視覚的に）的確に相手に伝える |
| 知的コンピテンシー－問題を解決する力 | |
| 情報を収集する力 | 幅広い観点から情報源を見定め、適切な手段を用いて情報を収集・調査し、それらを適切に整理・保存する力 |
| 情報を分析する力 | 事実と意見を区別し、事実を整理・分類し、それらを統合して隠れた構造を捉え、本質を見極める力 |
| 課題を発見する力 | 広い視野から現象や事実を捉え、それらの原因について考察し、解決すべき課題を発見する力 |
| 構想する力 | 条件・制約を考慮しながら問題解決までのプロセスを構想し、その過程で想定されるリスクやその対処方法を構想する力 |
| 社会コンピテンシー－対人領域 | |
| 他者を思う力 | 自分異なる立場や意見でも、共感し、受け入れることができる |
| 話し合う力 | どんな相手に対しても、相手に合わせて、自分の考えを述べることができる |
| 協働する力 | 自分や周囲の役割を理解し、互いに連携・協力して物事を行う |
| 情報を共有する力 | 一緒に物事を進める人達と情報を共有する |
| 助け合う力 | 互いに力を貸して助け合う |
| 議論する力 | 集団の中で自分の意見を主張する |

| | |
|---|---|
| 社会コンピテンシー－対自己領域 | |
| 前を向く力 | 自分の感情や気持ちを認識し、客観的に自分の言動をコントロールする |
| 自己を理解する力 | 他者と自己の違いを認め、自己の強みを認識する |
| 就業観を養う力 | 選択基準としての職業観・勤労感の確立、および主体的な選択をする力 |
| 自信を持つ力 | 自分にやればできるという予測や確信を持つ |
| 主体的に行動する力 | 自己の意志や判断において自ら進んで行動する |
| 将来を設計する力 | 現状を把握し、将来設計をする力 |
| 社会コンピテンシー－対課題領域 | |
| 目標を決める力 | ゴールイメージを明確にし、目標を立てる |
| 計画を立てる力 | 目標の実現や課題解決に向けての見通しを立てる |
| 実践する力 | 自ら物事にとりかかる、実行に移す |
| 原因を考える力 | さまざまな角度から課題を分析し、原因を明らかにする力 |
| 計画を評価する力 | 立案した計画を客観的に評価する力 |
| 修正・改善する力 | 状況をみながら、計画や行動を柔軟に変更する |

の結果がでるように課題に取り組んでいる

レベル４―成果を上げるために、自分に割り当てられたことにとどまらず、集団の中で果たすべき役割を自ら考え、周囲と協力して課題に取り組むことができる

自主社会活動後の報告会時に、学生にルーブリックの評価表を配布し、次の２つの方法で自己評価を行った。

**①自主社会活動前後でのコンピテンシー評価基準段階の伸長の自己評価**

まず、自主社会活動の前後で、コンピテンシー評価基準段階がどのように変化したかを学生の自己評価で選択させた。次に、学生全体に対して、活動前後それぞれで基準値（レベル１～４）の平均を求め、評価基準ごとに前後の差を算出した。表４にコンピテンシー各評価基準の平均伸長と領域毎の平均を示す。また、特に自らコンピテンシーが伸長したと考える項目順上位５項目を示す。集計の結果、前後での平均の伸長が0.79、標準偏差が0.21となった。

領域毎のコンピテンシーの伸長では、対人領域の伸長がもっとも大きく、伸長したと学生自身が考える項目も多いことがわかる。その中でも、「他者を思う力」と「協働する力」の伸長が高く、自主社会活動での学外の活動で、様々な人との交流によって伸ばすことができるコンピテンシーと考えることができる。また、対自己領域の「自己を理解する力」と「自信を持つ力」の伸長が次に

表４　コンピテンシー各評価基準の平均伸長と分類平均

| 領域 | 評価基準 | 平均伸長 | 領域平均 |
|---|---|---|---|
| 知識活用 | 読み解く力▼ | 0.50 | 0.69 |
| | 書き表す力▼ | 0.56 | |
| | 資料を活用する力 | 0.75 | |
| | 創造する力 | 0.88 | |
| | 論理的に表現する力 | 0.75 | |
| 問題解決 | 情報を収集する力▼ | 0.38 | 0.61 |
| | 情報を分析する力▼ | 0.63 | |
| | 課題を発見する力 | 0.81 | |
| | 構想する力▼ | 0.63 | |
| 対人領域 | 他者を思う力▲② | 1.19 | 0.97 |
| | 話し合う力 | 0.81 | |
| | 協働する力▲① | 1.44 | |
| | 情報を共有する力 | 0.75 | |
| | 助け合う力③ | 0.81 | |
| | 議論する力 | 0.81 | |
| 対自己領域 | 前を向く力 | 0.75 | 0.85 |
| | 自己を理解する力▲ | 0.94 | |
| | 就業観を養う力 | 0.88 | |
| | 自信を持つ力▲ | 1.00 | |
| | 主体的に行動する力⑤ | 0.88 | |
| | 将来を設計する力 | 0.69 | |
| 対課題領域 | 目標を決める力 | 0.69 | 0.75 |
| | 計画を立てる力 | 0.69 | |
| | 実践する力▲④ | 0.94 | |
| | 原因を考える力 | 0.69 | |
| | 計画を評価する力 | 0.81 | |
| | 修正・改善する力 | 0.69 | |

※▲－伸長上位５項目　　▼－伸長下位５項目
※項目名後の丸数字は、自己評価上位５項目の順

高い。これは、自主社会活動後に行っているｅポートフォリオなどでの報告による振り返りに、効果がある可能性を示唆するものと考えることができる。「主体的に行動する力」に関しては、自己評価として選択している学生が多い。

一方、知識を活用する力や問題を解決する力の領域については、伸長はしているものの、他と比べると伸長の度合いが低い。今回対象とした自主社会活動の内容を勘案すると、これらの領域については、妥当な結果と考えることができる。

②ｅポートフォリオで報告した自由記述文の分析

ｅポートフォリオでの自由記述内容をもとに、学生が活動を通して得たコンピテンシーを検証する。ここでは、「自主社会活動で学んだこと、成果など」の記述の中から、表 4で示したコンピテンシーに関連する内容を抽出した。抽出にあたっては、各コンピテンシーの項目名称に関連する語および節を、類義性、関連性の観点から認定し、当該語を含むまとまりをコンピテンシー伸長の根拠とした。

例えば、「対自己領域」における「主体的に行動する力」に関しては、「学生主体」「学生自ら」「自分から進んで」「自ら考え動き」などの表現を、「主体的に行動する」の根拠に相当する表現として扱った。また、「対人領域」における「他者を思う力」の場合は、学生からみて「他者」となる「子ども」「高齢者」「お客さん」という具体的表現に関連して「どのように接したらよいか」「どのようにサポートしたらよいか」というよう

表５　コンピテンシー各評価基準に関する延べ記述数

| 領域 | 評価基準 | 平均伸長 | 延べ記述数（学生数） |
|---|---|---|---|
| 対人領域 | 他者を思う力▲② | 1.19 | 18（15名） |
| 対自己領域 | 主体的に行動する力⑤ | 0.88 | 16（14名） |
| 対課題領域 | 実践する力▲④ | 0.94 | 14（13名） |
| 対課題領域 | 計画を立てる力 | 0.69 | 9（９名） |
| 対人領域 | 協働する力▲① | 1.44 | 7（６名） |
| 対自己領域 | 自信を持つ力▲ | 1.00 | 5（４名） |

※（　）の学生数は、自主社会活動の参加学生数23名のうち、評価基準に関連する記述があった学生数

な表現が共起している場合、「他者を思う力」に関する記述として認定した。

以上のような判断基準で、学生の自由記述文を分析したところ、コンピテンシーの伸長を裏付ける記述として、全101記述を抽出することができた。

次に、学生が自由に記述した文章に対して、どのようなコンピテンシーの伸長を認めることができるか検証するために、コンピテンシー各評価基準に関して、伸長の根拠となる記述数を算出した。表５に延べ記述数が５件以上のものを示す（先の議論とあわせてコンピテンシーの伸長を捉えるため、表４の結果を一部再掲する）。

表５より、表４で示した平均伸長が高い項目（▲）と、学生自身が伸長したと判断する項目（丸数字）が、学生の自由記述文中でも、概ね上位に位置することがわかる。「他者を思う力」についての記述は、参加学生数延べ23名に対し15名がコンピテンシーの伸長を裏付ける記述を行っており、年代や立場の異なる人々との関わりが、他者の存在を意識させ、共感性を高めるに有効であったといえる。「主体的に行動する力」については、自己評価として選択している学生が多かったが、学生の自由記述文中でも、「主体的に行動する力」に関連する語を多く抽出することができた。

その一方で、平均伸長の伸びが著しい「協働する力」については、延べ記述数７件に留まった。このことより、学生の自由記述に直接「協働する力」に関する語を抽出することができなくても、学生たちは、他者との関わりを通して「協働する力」の伸長を実感していることが推察される。

また、「計画を立てる力」については、平均伸長の度合いは低いが、自由記述文中では関連語を９件抽出することができた。ここで、「計画を立てる力」に関連する記述を行った９名について、評価基準の自己評価をみてみると、９名のうち６名は、活動後に「計画を立てる力」の評価基準を１つ上げており（１名はもともとレベル４）、自由記述内容と活動前後の評価基準段階の評価には、ある程度の関係性をみることができる。

最後に、評価基準段階の自己評価にて伸長が認められた「自己を理解する力」と「自信を持つ力」の項目について、自由記述文の内容との関連を述べる。表 5からわかるように、「自己を理解する力」と「自信を持つ力」についての自由記述の件数は多くはない。「自己を理解する力」に関わる記述は「自らの強みを知った」という１記述のみである。つまり、eポートフォリオ記入の段階では、実際の行動や他者との関わりなどの体験の記述が中心となり、自己を相対化し活動の価値づけが行われるのは、体験の言語化が終わった後、eポートフォリオの記述を見直し、自己の成長を改めて考える段階となることが推察される。

以上が、学生の自由記述文を対象にした分析であるが、学生の表現力が十分でない場合は、抽出した記述と評価基準との間に、明確な関連性を見いだしにくい例もあった。より有効な分析を行うためには、体験の言語化についてその方法論を開

発し、学生の言語力に合わせた効果的な指導を実施していく必要があることが示唆される。

## 6．まとめと今後の課題

本研究では、本学学生の自主社会活動での学修成果を多面的に測定することを目的として、アンケートやルーブリックによる自己評価、ｅポートフォリオに記述された自由記述文の分析を行った。その結果、学生の学修成果の観点では、以下のことが明らかになった。

・自主社会活動は、学生の今後の学修や就活に役立つとの認識が醸成され、満足度も高い授業である。
・「思考・判断」や「関心・意欲・態度」、「技能・表現」の自己評価は、自主社会活動の内容による差がある。活動目的や内容を分かりやすく表現することで、学生個々の目的に応じた活動が選択できる可能性を検討する必要がある。
・コンピテンシーでは、対人領域の「他者を思う力」と「協働する力」、対自己領域の「自己を理解する力」と「自信を持つ力」の伸長が高い。また、「主体的に行動する力」が伸長したと考えている学生も多い。対人領域のコンピテンシーに関しては、授業でのグループ活動や学内の諸活動でも身につけていくことは可能と考えるが、学外の様々な人との関わりや交流によって、より効果的にコンピテンシーの育成は行える可能性があることを示唆する。

また今回の分析を通して、コンピテンシーに関わる評価方法や評価指標に関しては、次のことが明らかになった。

・アンケートとルーブリック評価、自由記述文分析を組み合わせることで、学生の学修状況を多面的に評価できる可能性があることが明らかになった。
・ルーブリックにより明確な評価基準を示すことで、学生は「思考・判断」や「関心・意欲・態度」、「技能・表現」に関する自己評価を適切に行うことができる。ルーブリックは学生の自己評価のツールとして活用できることが検証できた。
・自主社会活動の一連のプロセスとして、ｅポートフォリオで活動日誌や報告書等提出、報告会での発表を実施することで、自主社会活動全体の振り返りと身についたコンピテンシーの自己評価を行うことができる。学びのPDCAの観点からは、妥当な授業設計と考えることができる。
・自由記述文分析では、学生自身の文書表現力により、コンピテンシーや学修の状況の洗い出しが困難になることがわかった。的確な記録を促すためには、語彙力を鍛える指導や、文章構成力の向上を意識した指導を行っていく必要がある。

今後の課題としては、以下のものがある。

・今回分析したデータ件数が少数のため、より信頼性を高めるために、さらに分析を継続する必要がある。
・今回は分析を行わなわなかったが、自主社会活動の内容を示す方法としての表現方法の検討、コンピテンシー間や活動内容との関連性の検討を行う必要がある。
・ｅポートフォリオに記述された自由記述文から、システム内部における記述内容のカテゴライズや評価が可能になるシステムの開発を検討する必要がある。
・一人一人の学生の成長を経年的に分析し、コンピテンシーの修得状況の可視化を図る方法を構築する必要がある。
・コンピテンシー項目間の関連性を分析し、評価規準や評価基準の妥当性を検証する必要がある。併せて、共通科目全体としての総合的なコンピテンシー育成に対応したカリキュラ

ムを開発する必要がある。

—参考文献—

1）中央教育審議会（2008），学士課程教育の構築に向けて，文部科学省
2）中央教育審議会（2012），新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて，文部科学省
3）野本ひさ他（2015），どのような体験が愛大学生コンピテンシーを獲得させるのか？，大学教育実践ジャーナル（13）愛媛大学，1 - 7
4）成田秀夫（2014），エビデンスに基づいた大学教育の再構築に向けて，情報知識学会誌 24（4），393-403
5）山西博之（2010），教育・研究のための自由記述アンケートデータ分析入門,外国語教育メディア学会（LET）関西支部 メソドロジー研究部会2010 年度報告論集，110-124
6）須田昂宏（2017），リアクションペーパーの記述内容に基づく学生の学びの可視化，日本教育工学会論文誌 41（1），13-28
7）Linda Suskie（2015），学生の学びを測る，玉川大学出版部（齋藤聖子訳）
8）沖裕貴（2014），大学におけるルーブリック評価導入の実際，立命館高等教育研究14号，71-90
9）坪井泰士（2016），ジェネリックスキルの測定の成果と課題，工学教育 64-4，47-52